



新型インフルエンザワクチン接種後の、 ギラン・バレー症候群の発症 に備える

獨協医科大学神経内科 講師
小鷹昌明

新型インフルエンザ A (H1N1) ウイルスによるパンデミックが発生し、遅ればせながらワクチン接種が開始されている。しかしながら、ワクチンには副反応も存在し、10万回の接種によってギラン・バレー症候群 (Guillain-Barré syndrome, GBS) 発症が1人程度増える。

通常の GBS は、*Campylobacter jejuni* やサイトメガロウイルスなどの微生物感染後に発症する。急性期患者血清中には、しばしばガングリオシド GM1 に対する IgG 抗体が検出され、GBS から分離された *C. jejuni* の菌体外膜の構成成分リポオリゴ糖とガングリオシド糖鎖との間には、「分子相同性」が存在する。最近、米国の研究グループにおいて、「インフルエンザワクチン接種と GBS 発症との間に関連性あり」と結論付けられた 1976 年の豚インフルエンザワクチン (A/New Jersey/1976/H1N1) をマウスに接種したところ、抗 GM1 抗体が誘導されたことが報告された。さらに、1991～92 年、2004～05 年の季節性インフルエンザワクチンにおいても、抗 GM1 抗体の上昇が確認された。ワクチンが GM1 構造を有し、抗 GM1 抗体産生を誘導し、GBS を惹起する可能性が示された。

しかしながら、著者の経験では、GM1 の欠損したマウスにガングリオシドやガングリオシド様リポオリゴ糖を感作しても抗 GM1 抗体産生の誘導は容易ではなく、結論には追試が必要であると考えている。そこで、実際に新型インフルエンザワクチンを購入し、この研究に倣ってワクチンを

マウスに接種する動物実験を開始した。抗 GM1 抗体が誘導されるかを調べているので、近い将来結果を公表する予定である。

ワクチン接種後の GBS をみた場合の対策を提案する。通常の GBS では、9 割の患者が神経症状発現の 1～2 週前に上気道炎症症状を、1 週前に胃腸炎症状を有する。GBS を疑った場合には、「1 週前に下痢をしていなかったか」、「2 週前に咽頭痛や咳、鼻水などの風邪をひいていなかったか」を尋ね、さらに「インフルエンザを含めたワクチンを発症 1 ヶ月以内に受けていなかったか」も尋ねる。ワクチンの接種歴が確認されたのなら、著者にも連絡していただきたい。(m-odaka@dokkyomed.ac.jp)

患者血清と接種ワクチンとを入手できれば、*C. jejuni* 腸炎後 GBS の発症機序で証明されているように、GBS 発症の原因を自己抗体産生誘導の観点から検証できる。血清中から末梢神経に対する自己抗体が検出され、実際に使用されたワクチンの構成成分から神経と相同する分子の存在が証明できれば、インフルエンザワクチン後 GBS の発症機序が明らかとなる。安全なワクチン製造にも寄与することであろう。

●略歴：日本神経学会神経内科専門医。1993 年獨協医科大学医学部卒業、同大学病院神経内科で研修後、博士課程を経て 2001 年より英国グラスゴー大学に留学。2005 年から現職。専門は免疫性末梢神経疾患の病態および治療。『医者になって十年目で思うこと』、『医者になって三十代』、『医療革命』（ともに近代文芸社）、『医者になってどうする！』（中外医学社）など医療エッセイストとしても活動中。

*本記事は、病院感染対策の総合専門誌「INFECTION CONTROL」誌（メディカ出版）最新号に掲載予定のものです。速報として web にて掲載しています。

*本記事の無断引用・転載を禁じます。